

---

# 足音

サイレンス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

足音

### 【Nコード】

N4953C

### 【作者名】

サイレンス

### 【あらすじ】

部屋にただ一人。暗い部屋で私が思うことは、これから起こることへの恐怖と、やってしまったことへの後悔。そして、また彼女の携帯が鳴る。

蒸し暑い。窓は閉め切り、電気さえ点けない部屋には一秒一秒を無慈悲に刻む時計と私の呼吸音だけが響いている。嫌な汗が身体中から噴き出している錯覚を覚える。やはりあんな事しなきゃよかったのに、と今更私は、胸の内で今日、何十回目になろう後悔をする。既に時計の針は十時過ぎを指しており、私はなんとかこの空気に触れる面積を減らそうと身体を縮こませる。

このまま眠ってしまい、朝が迎えられればどんなに楽なのに。と思いはしたが、目は変に醒めており身体は睡眠などという精神の開放はしてくれない。今日に限って親は外出して居らず、この時ほど親が居てくれればと、いつもは邪険に扱う親が恋しくなる。

カラフルなストラップが付いている携帯電話は握り締める力が入っているのか異様に白く変色した手で握られている。

ピリリン

手中の携帯電話が鳴る。私は恐る恐る暗闇の中、光るディスプレイを覗き込むとそこには恐れていた名前が記されていた。私は携帯電話を落とさぬよう震える両手でしっかりと握り締めると耳元へと持っていく。

「し、しおり、来た、私にも来た……」

私は受話器の向こうで必死に荒い呼吸をしながら冷静さを保つ亜美の声をに耳を傾けるしか無い。またあの嫌な汗が全身に染み渡っていくのが分かる。

「あ、あ、来る。今廊下を歩く足音が聞こえる……どうしようもう

どうしよう」

いつもは冷静な亜美の音が荒んで行く。私はまだ一言も発せていない。身体が硬直し発せられない。

受話器の向こうでがちゃりとドアの開く音がした。

「あ、や、やめて！ やめて来ないでやだ、いや、こな……………」

耳元の携帯電話からは既に通話終了の電子音だけが流れているのを私はただ聞く。

「な、なんで……………なんで」

私はようやく言葉を絞りだした。これで四人。数時間前からこの様な電話が掛かってくるのだ。始めは私もただの冗談だと思っていた。けれど、再び電話を掛けようと、掛からない。

オカルトなど信じていなかった亜美までがこんな助けを求める様な電話を掛けてきた。ただ、その会話を聞く事しか出来ない私にとっては、次は自分、と言う恐怖心が煽られるだけ。

「ただの肝試しじゃなかったの！？ 誰も信じない、ただどこにもある都市伝説だと思っ

ていたのに！ これです四人あと私を含めて二人……………」

どことなく笑いが込み上げてくる。

「次は……………わたし？」

涙を流しながら私は口元には笑みを溢していた。もう逃げられない。もう逃げる術なんて無い。どこに逃げたって逃げ切れるモノじゃない。そうよ、現に加奈子は逃げ切れなかった。

ひ、ひ、ひひひひひひ

笑いが止まらない。嗚咽混じりの笑い声は蒸し暑いこの暗い部屋に響く。

ぴりりり

再び携帯電話が鳴り響く。残っている仲間の一人のアイコだ。私は先ほどとは違い、何故か自信が持てたように電話に出た。

「しおり！ 大丈夫なの？ 急にみんなの携帯に電話掛からなくなっちゃったから心配したんだよ！」

アイコの心配そうな声が聞こえる。

「もう。だめ。私には聞こえるの」

私は込み上げるどうしようもない笑いを抑え、嗚咽のままアイコに話し掛ける。

「足音が。亜美も加奈子も早百合も美香もみんなあの足音で死んじやった。死んだ、のよ。私

に電話の最中にみんなあの足音に殺された。殺された。殺された。殺された殺された。」

「しおり！？ 落ち着いてしおり！！ 違うのよ！ 実はね、これ

は

「もう遅いよ。もうすぐそこまで足音が近づいているの。ほら、聞こえるでしょ？ ぴたり、ぴたり、って！ アハ、アハハ」

私はまだ必死に何かを叫ぶアイコの声にする携帯電話をドアに投げつけ、再び座り込んだ。足音はもうすぐ側まで来ている。私には聞こえる。

「私も殺されるんだ。死ぬんだ。この足音に殺されるんだ。死ぬんだ」

私の頭に最悪の結末が浮かび上がる。私は殺されたくない。苦しんで死にたくない。そうだ。無防備に殺されるなら、いつそ。

私は立ち上がり、カーテンも閉めずにいたベランダに続く窓を開け、ベランダから外を見回した。

「あんなのに殺されたくない。私は殺されない。私はただ一人殺されないんだ。亜美、苦しかった？ 加奈子、恐かった？ 早百合、痛かった？ 美香、辛かったでしょ？」

足音がそこまで来た。「あれ」と私を区切るのは薄いドアだけ。ドアだけ。もうすぐそこにいる。いるんだいるんだいるんだいるんだいるんだいるんだ

私は殺されない殺せない殺されない殺され殺される殺された殺される殺されて殺された殺される殺されたのよ殺されない殺されそう殺されたい殺したい殺す殺される殺される殺され殺



「あのね、昨日私が最後にしおりに電話掛けたじゃない。その時しおり変な事言ってたのよ。足音が聞こえるって。私達のは全部冗談とかでしょ？ けどしおりには聞こえたって言ってたのよ。足音が」

「……クスツ、まさか〜！ まったくアイコは上手いんだから！ 私達までびびらせるつもり？」

誰も居なくなった教室で、アハハと白い花の添えられた机の囲み、笑う四人と一緒に笑みを浮かべたアイコは、ふと昨日の事を思い出す。確かに聞こえた、

ぺたん、ぺたん

という何物かの足音を。



(後書き)

はい、うらめしや。サイレンスです。この初挑戦のホラーどうですか？友達から聞いた話を元にしました。どこにでもある話なんですよと似ているわ〜！！という苦情は無しで(笑)いや、正直辛かったです。

さて、これは、私が「足音」を執筆していた時のお話です。そう、それはもう夜中の一時くらいだったでしょうか。その時も私は好きなアーティストの音楽を聞きながらパソコンで執筆をしていたのですが、最後の詰めに近づいた時、

ブチッ

といきなり音楽が途切れました。私は機械の故障かと思い仕方なく再びパソコンの画面に目を移したのですが、小説本文のある一部分が点滅しはじめたのです。私は焦りました。まさか、本物のお……ば……けいや！！

私はなんとかその一部の点滅を消そうと試行錯誤した結果、その一文を削ることにしました。すると……今まで止まっていた音楽が急に鳴りだし、点滅は消えました。あれは一体何だったのでしょいか？

……実際、体験するとは思っていませんでした。

ひゃー(泣)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4953c/>

---

足音

2010年12月29日14時01分発行